

日蓮大聖人御書全集

みようほうびくにごへんじ

妙法比丘尼御返事

新版
2104
ゝ
2121

みようほうびくにごへんじ
妙法比丘尼御返事

こうあんがんねん がつ にち さい みようほうあま
弘安元年('78) 9月6日 57歳 妙法尼

おんふみ い 太 布 帷 ひと 兄 嫁 そうろう

御文に云わく「たふかたびら一つ、あによめにて候

にようぼう 伝 うんぬん 尾 張 じろうひようえどの ろくがつ

女房のつたう」と云々。また「おわりの次郎兵衛殿、六月

にじゅうにち し たも うんぬん

二十二日に死なせ給う」と云々。

ふほうぞうきよう もう きよう ほとけ わ めつご わ ほう ひろ

付法蔵経と申す経は、仏、我が滅後に我が法を弘むべ

様 と たま そうろう なか わ めつご しようほう

きようを説かせ給いて候。その中に「我が滅後正法

いっせんねん あいだ しだい つか 遣 だいいち かしようそんじや

一千年が間、次第に使いをつかわすべし。第一は迦葉尊者

にじゅうねん だいに あなんそんじやにじゅうねん だいさん しゅうなわしゆにじゅうねん

二十年、第二は阿難尊者二十年、第三は商那和修二十年、

ないしだいにじゆうさん

ししそんじや

うんぬん

乃至第二十三は師子尊者なり」と云々。

だいさん

しょうなわしゅ

もう

ひと

おんこと

ほとけ

と

たま

その第三の商那和修と申す人の御事を仏の説かせ給い

そうろう 様

しょうなわしゅ

もう

ころも

な

ひと

う

て候ようは、商那和修と申すは衣の名なり。この人、生

とき

ころも

着

う

そうら

ふしぎ

まれし時、衣をきて生まれて候いき。不思議なりしこと

ろくどう

なか

じごくどう

にんどう

いた

なり。六道の中に、地獄道より人道に至るまでは、いかな

ひと

はじ

赤

裸

そうろう

てんどう

ころも

着

う

る人も始めはあかはだかにて候に、天道こそ衣をきて生

そうら

けんじん

しょうにん

ひと

う

まれ候え。たといいかなる賢人・聖人も、人に生まるる

習

みな

いっしょうふしよ

ぼさつ

ならいは皆あかはだかなり。一生補処の菩薩すら、なお

裸

う

たま

ほか

はだかにて生まれ給えり。いかにいわんや、その外をや。

ひと

しようなえ

もう

ころも

纏

しかるにこの人は、商那衣と申すいみじき衣にまとわれ

う

たま

ころも

ち

付

汚

て生まれさせ給いしが、この衣は血もつかず、けがるるこ

たと

いけ

はちす

生

鴛鴦

はね

みず

濡

ともなし。譬えば、池に蓮のおい、おしの羽の水にぬれざ

ひと

しだい

しようちよう

ころも

るがごとし。この人、次第に生長ありしかば、またこの衣

しだい

ひろ

なが

ふゆ

厚

なつ

薄

はる

あお

次第に広く長くなる。冬はあつく、夏はうすく、春は青く、

あき

しろ

そうら

ちようじや

なにごと

秋は白くなり候いしほどに、長者にておわせしかば、何事

乏

のち

ほとけ

しる

置

たま

違

もともしからず。後には仏の記しおき給いしことたがうこ

ゆえ

あなんそんじや

みでし

たま

ごしゆつけ

となし。故に、阿難尊者の御弟子とならせ給いて御出家あ

ころもへん

ごじよう

しちぎよう

くじようとう

おんけさ

りしかば、この衣変じて五条・七条・九条等の御袈裟と

そうら

なり候いき。

ふしぎ

そうら

ゆえ

ほとけ

と

たま

様

かかる不思議の候いし故を仏の説かせ給いしようは、

ないおうかこあそうぎこう

そのかみ

ひと

しようにん

乃往過去阿僧祇劫の当初、この人は商人にてありしが、

ごひやくにん

しようにん

たいかい

ふね

う

商

五百人の商人とともに大海に船を浮かべてあきないをせ

うみべ

じゅうびよう

もの

びやくしぶつ

もう

しほどに、海辺に重病の者あり。しかれども、辟支仏と申

きじん

せんごう

やまい

罹

み

婁

して貴人なり。先業にてやありけん、病にかかりて、身やつ

こころ老耄

ふじよう

纏

しようにん

哀

れ心おぼれ、不浄にまとわれておわせしを、この商人あわ

たてまつ

懇

かんびよう

い

ふじよう

れみ奉つて、ねんごろに看病して生かしまいらせ、不浄

濯

捨

あらぬの

しようなえ

着

をすすぎすてて、麤布の商那衣をきせまいらせてありしか

しようにんよろこ

がん

い

なんじ

われ

たす

み

ば、この聖人悦んで願じて云わく「汝、我を助けて身の

はじ かく

ころも こんじよう ごしよう ころも

恥を隠せり。この衣を今生・後生の衣とせん」とて、や

ねはん い たま

くどく

か こむりようこう

がて涅槃に入り給いき。この功德によりて、過去無量劫の

あいだ にんちゆう てんじよう う

う

たび

ころも み

間、人中・天上に生まれ、生まるる度ごとに、この衣身

したが はな

ないし こんじよう しやかによらい めつご

に随つて離るることなし。乃至、今生に釈迦如来の滅後、

だいさん ふぞく 受

しようなわしゆ もう しようにん

まとらこく

第三の付嘱をうけて商那和修と申す聖人となり、摩突羅国

うるだせん もう

やま だいがらん た

むりよう しゆじよう きようけ

の優留茶山と申す山に大伽藍を立てて無量の衆生を教化

ぶつぽう ぐつう たま

にじゅうねん せん

して、仏法を弘通し給いしこと二十年なり。詮ずるところ、

しようなわしゆびく いっさい 樂

ふしぎ みな か ころも

商那和修比丘の一切のたのしみ・不思議は皆、彼の衣より

しゅつしょう

と

そうら

出生せりとこそ説かれて候え。

にちれん なんえんぶだいにほんこく もう くに もの

しかるに、日蓮は南閻浮提日本国と申す国の者なり。こ

くに ほとけ よ い たま くに ひがし あ

の国は、仏の世に出でさせ給いし国よりは東に当たつて

にじゅうまんより ほか はる かいちゆう こじま ほとけ

二十万余里の外、遥かなる海中の小島なり。しかるに、仏

ごにゆうめつ すで にせんにひやくにじゅうしちねん がっし かんど ひと

御入滅ありては既に二千二百二十七年なり。月氏・漢土の人

くに ひとびと み そうら くに ひと い ず おおしま

のこの国の人々を見候えば、この国の人の伊豆の大島、

おうしゆう ひがし 蝦夷 み そうら

奥州の東のえぞなんどを見るようにこそ候らめ。

にちれん にほんこくあわのくに もう くに う そうら

しかるに、日蓮は日本国安房国と申す国に生まれて候い

たみ いえ い へうべ 剃 けさ 着

しが、民の家より出でて頭をそり袈裟をきたり。「この度、

たび

いかにもして仏種をもうえ生死を離るる身とならん」おもと思

そうら

つて候いしほどに、皆人の願わせ給うことなれば、

あみだぶつ

侍

たてまつ

ようしよう

みようごう

とな

そうら

阿弥陀仏をたのみ奉り、幼少より名号を唱え候いしほ

うたが

ゆえ

ひと

どに、いささかのことありて、このことを疑いし故に、一

がん

発

つの願をおこす。

にほんこく

わた

ぶつきよう

ぼさつ

ろん

にんし

「日本国に渡れるところの仏経ならびに菩薩の論と人師

しやく

なら

みそうら

くしやしゆう

じようじつじゆう

りつしゆう

の釈を習い見候わばや。また俱舎宗・成実宗・律宗・

ほつそうしゆう

さんろんしゆう

けこんしゆう

しんこんしゆう

ほつけてんだいしゆう

もう

しゆう

法相宗・三論宗・華嚴宗・真言宗・法華天台宗と申す宗

数

多あ

聞

うえ

ぜんしゆう

じようどしゆう

もう

しゆう

どもあまた有るときく上に、禅宗・浄土宗と申す宗も

そうろう

しゅうじゅう しよう

細

なら

候なり。これらの宗々、枝葉をばこまかに習わずとも、

しよせん かんよう し み

おも ゆえ ずいぶん 走

所詮・肝要を知る身とならばや」と思いし故に、随分にはし

回 じゅうに じゅうろく とし さんじゅうに いた

にじゅうよねん

りまわり、十二・十六の年より三十二に至るまで、二十余年

あいだ かまくら きよう えいざん おんじようじ こうや てんのうじとう

くにぐにてらでら

が間、鎌倉・京・叡山・園城寺・高野・天王寺等の国々寺々

粗々なら めぐ そうら

ひと ふしぎ

あらあら習い回り候いしほどに、一つの不思議あり。

われ 果 無 こころ すい

ぶつぽう いちみ

我らがはかなき心に推するに、「仏法はただ一味なるべ

こころ い なら ねが

しろうじ はな

し。いずれもいずれも、心に入れて習い願わば、生死を離

おも そうろう ぶつぽう なか い あ なら

るべし」とこそ思つて候に、仏法の中に入つて悪しく習い

そうら ほうぼう もう おお あな お い

じゅうあく

候いぬれば、謗法と申す大いなる穴に堕ち入つて、十悪

ごぎやく もう ひびよよ せつしよう ちゅうとう じやいん もうごとう 犯

五逆と申して日々夜々に殺生・偷盜・邪淫・妄語等をおか

ひと ごぎやくざい もう ふぼとう ころ あくにん

す人よりも、五逆罪と申して父母等を殺す悪人よりも、

びく びくに み にひやくごじっかい 堅 たも こころ

比丘・比丘尼となりて身には二百五十戒をかたく持ち、心

はちまんほうぞう 浮 そうろう ちしや しょうにん いっしょう

には八万法蔵をうかべて候ようなる智者・聖人の、一生

あいだ いちあく 造 ひと ほとけ 思

が間に一悪をもつくらず、人には仏のようにおもわれ、我

み あくどう お おも

が身もまたさながらに悪道にはよも堕ちじと思うほどに、

じゅうあくごぎやく ざいにん 強 じごく お あ びだいじよう

十悪五逆の罪人よりもつよく地獄に堕ちて、阿鼻大城を

すみか なが じごく 出 そうつら

栖として永く地獄をいでぬことの候いけるぞ。

たと ひと よ こくしゆ 仕 たてまつ

譬えば、人ありて、世にあらんがために国主につかえ奉

るほどに、させるあやまち過はなけれども、我が心わ こころのたらぬ

上う え、身みにあやしきふるまい怪かさなるを、なお我が身わ みにも失とがあ

知知 ぼうばい ふしぎ 思思 きさきとう

りともしらず、また傍輩おんことも不思議ともおもわざるに、后等

過過 じねん

の御事によりてあやまつことはなけれども自然じねんにふるまい

悪悪 おう ふしぎ み むほん もの

あしく、王ななどに不思議に見えまいらせぬれば、謀反むほんの者

とがおも 失失 ふぼ

よりもその失重とがおもし。この身みとがにかかりぬれば、父母・

きようだい しよじゆう 軽軽 とが 行行

兄弟・所従ななどもまたかるからざる失におこなわるる

ことあり。

ほうぼう もう つみ われ 知 ひと とが おも

謗法と申す罪をば、我もしらず、人も失とも思わず、ただ

ぶつぼう

習

たつと

おも

そうろう

ひと

「仏法をならえば貴し」とのみ思つて候ほどに、この人も、

ひと

従

でしだんなとう

むけんじごく

お

またこの人にしたかう弟子檀那等も、無間地獄に墮つること

しょういびく

くがんびく

もう

そう

あり。いわゆる、勝意比丘・苦岸比丘なんど申せし僧は、

にひやくごじっかい

堅

たも

さんぜん

いぎ

ひと

欠

二百五十戒をかたく持ち、三千の威儀を一つもかけずあり

ひと

むけんだいじよう

お

い

ごみ

か

し人なれども、無間大城に墮ちて出ずる期見えす。また彼

びく

ちか

でし

だんな

ひとびと

ぞん

ほか

の比丘に近づきて弟子となり檀那となる人々、存の外に

だいちみじん

かず

おお

じごく

お

し

く

う

大地微塵の数よりも多く地獄に墮ちて、師とともに苦を受

ひと

ごせ

しゅぜん

しゅ

ほか

けしぞかし。この人、後世のために衆善を修せしより外は

こころ

ふしよう

遭

そうら

また心なかりしかども、かかる不祥にあいて候いしぞか

し。

みそうら

粗

々

きようろん

かんが

かかることを見候いしゆえに、あらあら経論を勘え

そうら

にほんこく

とうせい

に

そうら

よすえ

候えば、日本国の当世こそ、それに似て候え。代末にな

そうら

せけん

政

荒

よ

なか

り候えば、世間のまつりごとのあらきにつけても世の中

危

うえ

にほんこく

たこく

似

ぶつぼうひろ

あやうかるべき上、この日本国は他国にもにず仏法弘まり

くに 治

おも

そうら

なかなか

ぶつぼうひろ

て国おさまるべきかと思つて候えば、中々、仏法弘まりて

よ

甚

おとろ

ひと

おお

あくどう

お

み

そうろう

世もいたく衰え人も多く悪道に墮つべしと見えて候。

ゆえ

にほんこく

がっし

かんど

どうとうとう

おお

なか

その故は、日本国は月氏・漢土よりも堂塔等の多き中に、

だいたい

あみだどう

うえ

いえ

あみだぶつ

もくぞう

つく

大体は阿弥陀堂なり。その上、家ごとに阿弥陀仏を木像に造

えぞう か ひと ろくまん はちまんとう ねんぶつ もう

り画像に書き、人ごとに六万・八万等の念仏を申す。また

たほう なげう さいほう ねが ぐしや まなこ たつと み そうろう

他方を抛って西方を願う。愚者の眼にも貴しと見え候

うえ いっさい ちじん みな 褒 たも

上、一切の智人も皆いみじきことなりとほめさせ給う。

にんのうごじゆうだいかん むてんのう ぎよう こうぼうだいし もう しょうにん

また人王五十代桓武天皇の御宇に、弘法大師と申す聖人

くに う かんど しんこんしゅう もう 珍 ほう

この国に生まれて、漢土より真言宗と申すめずらしき法を

なら つた へいぜい さが じゅんなとう おう おんし とうじ

習い伝え、平城・嵯峨・淳和等の王の御師となりて、東寺・

こうや もう てら こんりゅう じかくだいし ちしょうだいし もう

高野と申す寺を建立し、また慈覚大師・智証大師と申す

しょうにん おな しゅう なら つた えいざん おんじようじ ぐつう

聖人、同じくこの宗を習い伝えて、叡山・園城寺に弘通せ

にほんこく さんじいちどう ほう つた いま しんこん おこな

しかば、日本国の山寺一同にこの法を伝え、今に真言を行

い鈴れいをふりて公家・武家の御祈りをし候そうろう。いわゆる

にかいどう だいみどう わかみやとう べつとうとう いにしえ おん

二階堂・大御堂・若宮等の別当等これなり。これは古も御

侍侍 うえ とうせい こくしゅとう いえ はしら てん にちがつ かわ

たのみある上、当世の国主等、家には柱、天には日月、河

はし うみ ふね おん

には橋、海には船のごとく御たのみあり。

ぜんしゅう もう とうせい じさいとう けんちようじとう 崇

禅宗と申すは、また当世の持斎等を建長寺等にあがめさ

たま ふぼ おも かみ おん 侍

せ給いて、父母よりも重んじ、神よりも御たのみあり。さ

いつさい しょにん とうへ 傾 て

れば、一切の諸人、頭をかたぶけ、手をあざう。

よ そうろう てんぺん もう すいせい

かかる世に、いかなればにや候らん、天変と申して彗星

なが とうざい わた ちよう もう だいち 覆

長く東西に渡り、地天と申して大地をくつがえすこと大海

たいかい

ふね おおかぜ ときおおなみ

に おおかぜ ふ

の船を大風の時大波のくつがえすに似たり。大風吹いて

そうもく 枯 ききん ねんねん 行 えきびようつきづき 起

草木をからし、飢饉も年々にゆき、疫病月々におこり、

だいかんばつ かわ いけ でんぱた みな 乾

大旱魃ゆきて、河・池・田畠、皆かわきぬ。かくのごとく、

さんさいしちなん すうじゅうねん お たみはんぶん げん のこ

三災七難、数十年起こつて民半分に減じ、残りは、あるい

ふぼ きようだい さいし 別 なげ こえ

は父母、あるいは兄弟、あるいは妻子にわかれて歎く声、

あき むし 異 いえいえ 散 失 ふゆ そうもく ゆき

秋の虫にことならず。家々のちりうすること、冬の草木の雪

責 に きようろん

にせめられたるに似たり。これはいかなることぞと経論を

ひ みそうら ほとけ のたま ほけきよう もう きよう ぼう われ

引き見候えば、仏の言わく「法華経と申す経を謗じ、我

もち くに ほとけ しる 置

を用いざる国あらば、かかることあるべし」と仏の記しお

かせ給いて候御言に、すこしもたがい候わず。

にちれんうたが

い

にほん

たれ

ほけきよう

しゃかぶつ

ぼう

日蓮疑って云わく「日本には誰か法華経と釈迦仏をば謗

うたが

ぼう

もの

しょうしよう

すべき」と疑う。また、「たまさか謗ずる者は少々あり

しん

もの

おお

ぞん

そうろう

とも、信ずる者こそ多くあるらめ」と存じ候。ここに、

にほんこく

ひと

あみだどう

造

ねんぶつ

もう

この日本国に人ごとに阿弥陀堂をつくり念仏を申すその

こんぼん

たず

どうしやくぜんじ

ぜんどうおしょう

ほうねんしようにん

もう

根本を尋ねれば、道綽禪師・善導和尚・法然上人と申す

さんにな

ことば

い

そうろう

じょうどしゆう

こんぼん

いま

しよにな

三人の言より出でて候。これは浄土宗の根本、今の諸人

おんし

さんにな

ねんぶつ

ひろ

たま

とき

宣

の御師なり。この三人の念仏を弘めさせ給いし時にのたま

いちにな

う

ものあ

せん

なか

ひと

な

わく、「いまだ一人も得る者有らず」「千の中に一りも無し」

しゃへいかくほう とうんぬん 言

心

あみだぶつ

恃

たてまつ

「捨閉閣抛」等云々。いうところは、「阿弥陀仏をたのみ奉

ひと

いつさい

きよう

いつさい

ほとけ

いつさい

かみ

捨

らん人は、一切の経、一切の仏、一切の神をすてて、た

あみだぶつ

なむ

あみだぶつ

もう

うえ

だ阿弥陀仏・南無阿弥陀仏と申すべし。その上、ことに

ほけきよう

しゃかぶつ

す

勸

易

法華経と釈迦仏を捨てまいらせよ」とすすめしかば、やすき

あん

つ

そうら

いちにんつ

はじ

ままに、案もなくばらばらと付き候いぬ。一人付き始めし

ばんにんみなつ

そうら

ばんにんつ

かみ

こくしゆ

なか

かば、万人皆付き候いぬ。万人付きしかば、上は国主、中

だいじん

しも

ばんみんいちにん

のこ

くに

は大臣、下は万民一人も残ることなし。さるほどに、この国、

ぞん

ほか

しゃかぶつ

ほけきよう

おんてきじん

存の外に釈迦仏・法華経の御敵人となりぬ。

ゆえ

いま

さんがい

みな

わ

う

なか

その故は、「今この三界は、皆これ我が有なり。その中の

しゅじよう

衆生は、ことごとくこれ吾が子なり。しかるに今この処は、

もろもろ げんなんおお

われいちにん

よ くご

と

諸の患難多し。ただ我一人のみ、能く救護をなす」と説い

にほんこく いっさいしゅじよう

しやかぶつ しゅ

て、この日本国の一切衆生のためには、釈迦仏は主なり師

おや

てんじんしちだい

ちじんごだい

にんのうくじゅうだい

かみ

おう

なり親なり。天神七代・地神五代・人王九十代の神と王と

しやかぶつ

しよじゅう

かみ

すら、なお釈迦仏の所従なり。いかにいわんや、その神と

おう

けんぞくとう

いま

にほんこく

だいち

さんが

たいかい

そうもくとう

王との眷属等をや。今、日本国の大地・山河・大海・草木等

みな

しやくそん

おんたから

まった

いちぶん

やくしぶつ

あみだぶつ

は皆、釈尊の御財ぞかし。全く一分も薬師仏・阿弥陀仏

とう

たぶつ

もの

等の他仏の物にはあらず。

にほんこく

てんじん

ちじん

くじゅうよだい

こくしゅ

また、日本国の天神・地神、九十余代の国主ならびに

ばんみん ぎゅうば い い しょう もの みな きようしゆしやくそん

万民・牛馬、生きと生ける生ある者は、皆、教主釈尊の

いっし にほんこく てんじん ちじん しよおう ばんみんとう てんち

一子なり。また日本国の天神・地神、諸王・万民等の、天地・

すいか ふぼ しゆくん なんによ さいし こくびやくとう わきま たも みな

水火・父母・主君・男女・妻子・黒白等を弁え給うは、皆、

きようしゆしやくそん みおし し まつた やくし あみだとう みおし

教主釈尊、御教えの師なり。全く薬師・阿弥陀等の御教

ほとけ われ だいち

えにはあらず。されば、この仏は、我らがためには、大地

あつ こくう ひろ てん たか ごおん

よりも厚く、虚空よりも広く、天よりも高き御恩まします

ほとけ ほとけ おうしん ばんみん ひと

仏ぞかし。かかる仏なれば、王臣・万民ともに人ごとに、

ふぼ おも かみ 崇 たてまつ

父母よりも重んじ、神よりもあがめ奉るべし。かくだに

そちら だいかあ てん しゆご 捨

も候わば、いかなる大科有りととも、天も守護してよもすて

給^{たま}わじ、地^ちもいかり給^怒うべからず。

しかるに、上^{かみいちにん}一人より下^{しもばんにん}万人に至^{いた}るまで、阿^あ弥^み陀^だ堂^{どう}を立て、

あ^あみ^みだ^だぶ^ぶつ^つ ^{ほんぞん} ^{ゆえ} ^{てんち} ^{おん} ^怒

阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}を本^{ほん}尊^{ぞん}ともてな^なす故^こに、天^{てん}地^ちの御^ごい^いか^かり^りあ^ある^るか^かと

み ^{そうろう} ^{たと} ^{くに} ^{もの} ^{かんど} ^{こうらいとう} ^{しよこく} ^{おう}

見^みえ^え候^{こう}。譬^{たと}え^えば、こ^この^の国^{こく}の^の者^{もの}が、漢^{かん}土^ど・高^{こう}麗^{らい}等^{とう}の^の諸^{しよ}国^{こく}の^の王^{おう}

^{こころ} ^寄 ^{くに} ^{おう} ^{そむ} ^{そうら} ^み

に心^{こころ}よ^よせ^せな^なり^りと^とも、こ^この^の国^{こく}の^の王^{おう}に^に背^{そむ}き^き候^{こう}い^いな^なば、そ^その^の身^みは

^保 ^{いま} ^{にほんこく} ^{いつさいしゆじよう}

た^たも^もち^ちが^がた^たか^かる^るべ^べし。今^{いま}、日^に本^{ほん}国^{こく}の^の一^{いつ}切^{せつ}衆^{しゆ}生^{じやう}も^もか^かく^くの^のご^ごと

^{さいほう} ^{こくしゆ} ^{あみだぶつ} ^{こころ} ^寄 ^わ ^{こくしゆ}

し。西^{せい}方^{ぽう}の^の国^{こく}主^{しゆ}・阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}に^には^は心^{こころ}よ^よせ^せな^なれ^れど^ども、我^わが^が国^{こく}主^{しゆ}・

し^しや^やか^かぶ^ぶつ^つ ^{そむ} ^{たてまつ} ^{ゆえ} ^{くに} ^{しゆごしん} ^怒 ^{たも}

釈^{しやく}迦^か仏^{ぶつ}に^に背^{そむ}き^き奉^{ほう}る^る故^こに、こ^この^の国^{こく}の^の守^{しゆ}護^ご神^{しん}い^いか^かり^り給^たう^うか^かと、

ぐ^ぐあ^あん ^{かんが} ^{そうろう} ^{くに} ^{ひとびと} ^{あみだぶつ}

愚^ぐ案^{あん}に^に勘^{かん}え^え候^{こう}。し^しか^かる^るを^を、こ^この^の国^{こく}の^の人^{ひと}々^々、阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}を、

こがね

しろがね

あかがね

もくえ

あるいは金、あるいは銀、あるいは銅、あるいは木画

とう ところざし

っ

たから

っ

ぶつじ

ほけきよう

等に 志 を尽くし財を尽くし仏事をなし、法華経と

しやかぶつ

すみえ

もくぞう

箔

引

釈迦仏をば、あるいは墨画、あるいは木像にはくをひかず、

そうどう

つく

れい

たにん

ところざし

かさ

あるいは草堂に造りなんどす。例せば、他人をば 志 を重

さいし

ふぼ

疎

ね、妻子をばもてなして、父母におろかなるがごとし。

しんごんしゅう

もう

しゅう

かみいちにん

しもばんみん

いた

また真言宗と申す宗は、上一人より下万民に至るまで、

あお

にちがつ

おも

ちんぼう

これを仰ぐこと日月のごとし。これを重んずること珍宝の

しゅう

ぎ

い

だいにちきよう

ほけきよう

にじゅう

ごとし。この宗の義に云わく「大日経には法華経は二重

さんじゅう

れつ

しやかぶつ

だいにちによらい

けんぞく

もう

三重の劣なり。釈迦仏は大日如来の眷属なり」なんど申す。

このことは弘法・慈覚・智証の仰せられし故に、今、四百余年
に、叡山・東寺・園城、日本国の智人一同の義なり。
えいざん とうじ おんじよう にほんこく ちじんいちどう ぎ
こうぼう じかく ちしよう おお ゆえ いま しひやくよねん

また禪宗と申す宗は、「真実の正法は教外別伝なり。」
ぜんしゆう もう しゆう しんじつ しょうほう きようげべつでん

法華経等の経々は教内なり。譬えば、月をさす指、渡り
ほけきようとう きようぎよう きようない たと つき ゆび わた

の後の船、彼岸に到つてなにかせん、月を見ては指は用事な
のち ふね ひがん いた 何 つき み ゆび ようじ

らず」等云々。彼の人々、謗法ともおもわず、習い伝えた
とううんぬん か ひとびと ほうぼう 思 なら つた

るままに存の外に申すなり。しかれども、この言は釈迦仏
ぞん ほか もう ことば しゃかぶつ

をあなずり、法華経を失い奉る因縁となりて、この国の
悔 ほけきよう うしな たてまつ いんねん くに

人々皆一同に、五逆罪にすぎたる大罪を犯しながら、しか
ひとびとみないちどう ごぎやくざい 過 だいざい おか

つみ 知
も罪ともしらず。

たいかしだい 積

この大科次第につもりて、人王八十二代隱岐法皇と申せ

おう

さどのいんとう

わ

そうでん

けにん

およ

し王ならびに佐渡院等は、我が相伝の家人にも及ばざりし

そうしゅうかまくら よしとき もう

ひと よ と

たま

相州鎌倉の義時と申せし人に代を取られさせ給いしのみ

しまじま

放

なげ

たま

つい

か

しまじま

ならず、島々にはなたれて歎かせ給いしが、終には彼の島々

かく

たま

たましい

あくりよう

じごく

お

にして隠れさせ給いぬ。

神は悪霊となりて地獄に堕ち

そうら

め つか

だいじん いげ

こうべ

刎

候いぬ。その召し仕われし大臣已下は、あるいは頭をはね

すいか い

さいしとう

おも

じ

られ、あるいは水火に入り、その妻子等は、あるいは思い死

し

たみ め

いまごじゅうよねん

ほか

にに死に、あるいは民の妻となりて今五十余年、その外の

しそん たみ

しんごん ねんぶつとう

子孫は民のごとし。これひとえに、真言と念仏等をもてな

ほけきよう しゃかぶつ だいおんてき

ゆえ てんしようだいじん

して法華經・釈迦仏の大怨敵となりし故に、天照太神・

しょうはちまんとう てんじんちぎ じつぼう さんぼう 捨 たてまつ

正八幡等の天神地祇、十方の三宝にすてられ奉つて、

げんしん わ しょうゆうとう 責 ごしよう じごく お そうら

現身には我が所従等にせめられ、後生には地獄に堕ち候

いぬ。

よあずま 移 とし 経

か

しかるにまた、代東にうつりて年をふるままに、彼の

こくしゆ うしな しんごんしゆうとう ひとびと かまくら くだ そうしゆう あしもと

国主を失いし真言宗等の人々、鎌倉に下り、相州の足下

潜 い 様 々 謀 ゆえ もと じようろう

にくぐり入つて、ようようにたばかる故に、本は上臈なれ

賺 かまくら しょうとう べつとう

ねんぶつしゃ

ばとて、すかされて鎌倉の諸堂の別当となせり。また念仏者

ぜんちしき

恃

だいぶつ

ちようらくじ

ごくらくじとう

崇

をば善知識とたのみて、大仏・長樂寺・極樂寺等とあがめ、

ぜんしゆう

じゆふくじ

けんちようじとう

崇

置

おきのほうおう

かほう

禪宗をば寿福寺・建長寺等とあがめおく。隠岐法皇の果報

つ

たま

とが

ひやくせんまいおくばい過

たいか

かまくら

の尽き給いし失より百千万億倍すぎたる大科、鎌倉に

しゆつたい

出来せり。

たいか

ゆえ

てんしやうだいじん

しやうはちまんとう

てんじんちぎ

かかる大科ある故に、天照太神・正八幡等の天神地祇、

しやか

たほう

じつぽう

しよぶつ

いちどう

おお

答

たも

ゆえ

釈迦・多宝・十方の諸仏、一同に大いにとがめさせ給う故に、

りんごく

しやうにんあ

ばんごく

つわもの

集

だいおう

おお

つ

隣国に聖人有つて、万国の兵をあつめたる大王に仰せ付

にほんごく

おうしん

ばんみん

いちどう

ばつ

巧

たも

けて、日本国の王臣・万民を一同に罰せんとたくませ給う

にちれん

予

きやうろん

かんが

そうら

を、日蓮かねて経論をもつて勘え候いしほどに、「これ

もう

こくしゆ

怒

ばんみん

もち

うえ

をありのままに申さば、国主もいかり、万民も用いざる上、

ねんぶつしや

ぜんしゆう

りつそう

しんごんしとう

さだ

いか

怨

念仏者・禅宗・律僧・真言師等、定めて忿りをなしてあだ

そん

おうしんとう

ざんそう

わ

み

たいなん起

でし

を存し、王臣等に讒奏して、我が身に大難おこりて、弟子

ないしだんな

すこ

にちれん

こころ寄

ひと

とが

乃至檀那までも少しも日蓮に心よせなる人あらば科にな

わ

み

いのち

およ

あん

し、我が身もあやうく命にも及ばんずらん。いかが案もな

もう

い

休

げてん

けんじん

なか

く申し出だすべき」とやすらいしほどに、外典の賢人の中に

よ

滅

し

もう

ゆしん

も、世のほろぶべきことを知りながら申さぬは、諛臣とて

諂

もの

ふ

ちおん

ひと

けん

りゆうほう

へつらえる者、不知恩の人なり。されば、賢なりし竜逢・

ひかん

もう

けんじん

くび

斬

むね

裂

比干なんと申せし賢人は、頸をきられ胸をさかれしかども、

くに だいじ

憚

もう

そうら

ぶつぽう

なか

国の大事なることをば、はばかり申し候いき。仏法の中

ほとけ

禁

のたま

ほけきよう

敵

み

よ

には、仏いましめて云わく「法華経のかたきを見て、世を

憚

おそ

もう

しやかぶつ

おんかたき

ちじん

はばかり恐れて申さずば、釈迦仏の御敵、いかなる智人・

ぜんにん

かなら

むけんじごく

お

たと

ふぼ

ひと

善人なりとも、必ず無間地獄に墮つべし。譬えば、父母を人

ころ

こ

み

ふぼ

知

おう

の殺さんとせんを、子の身として父母にしらせず、王を

過

たてまつ

ひと

しんか

み

し

あやまち 奉 らんとする人のあらんを、臣下の身として、知

よ

恐

もう

いまし

りながら代をおそれて申さざらんがごとし」なんと禁めら

そうろう

ほとけ

おんつか

だいばぼさつ

げどう

ころ

れて候。されば、仏の御使いたりし提婆菩薩は外道に殺

ししそんじゃ

だんみらおう

こうべ

刎

じく

どうしよう

そ

され、師子尊者は檀弥羅王に頭をはねられ、竺の道生は蘇

山へ流され、法道は面になやきをあてられき。これらは皆、
仏法を重んじ、王法を恐れざりし故ぞかし。

されば、賢王の時は、仏法をつよく立つれば、王、両方

を聞きあきらめて勝れ給う智者を師とせしかば、国も安穩

なり。いわゆる、陳・隋の大王、桓武・嵯峨等は、天台智者

大師を南北の学者に召し合わせ、最澄和尚を南都の十四人

に對論せさせて、論じかち給いしかば、寺をたてて正法を

弘通しき。大族王・優陀延王、武宗・欽宗、欽明・用明、

あるいは鬼神・外道を崇重し、あるいは道士を帰依し、あ

かみ あが ゆえ しやかぶつ だいおんてき み ほろ

るいは神を崇めし故に、釈迦仏の大怨敵となりて、身を亡ぼ

よ あんのん とき しょうにん そうりよ たいなん

し、世も安穩ならず。その時は、聖人たりし僧侶、大難に

遭 いま にほんこく だいほうぼう くに たこく 破

あえり。今、日本国、すでに大謗法の国となりて他国にやぶ

み

らるべしと見えたり。

し もう げんざい あんのん

これを知りながら申さずば、たとい現在は安穩なりとも、

ごしよう むけんだいじよう お ごしよう おそ もう

後生には無間大城に墮つべし。後生を恐れて申すならば、

るざい しざい いちじよう おも さだ い ぶんおう ころ こ

流罪・死罪は一定なりと思ひ定めて、去ぬる文応の比、故

さいみようじのにゆうどうどの もう あ もち たも

最明寺入道殿に申し上げぬ。されども用い給うことなか

ねんぶつしやとう よし き じようげ しょにん 語

りしかば、念仏者等、この由を聞いて上下の諸人をかたら

う ころ

叶

ながとき

い、打ち殺さんとせしほどに、かなわざりしかば、長時

むさしのかみどの ぐくらくじどの みこ

ゆえ おや みこころ し

武蔵守殿は極楽寺殿の御子なりし故に、親の御心を知つて

りふじん いずのくに なが たま ぐくらくじどの ながとき

理不尽に伊豆国へ流し給いぬ。されば、極楽寺殿と長時と、

か いちもんみな 滅 おのおのごらん のち

彼の一門皆ほろぶるを 各 御覧あるべし。その後、いかほ

め かえ のち きようもん

どもなくして召し返されて後、また経文のごとくいよいよ

もう 強 ぶんえいはちねんくがつじゆうににち さどのくに なが

申しつよる。また去ぬる文永八年九月十二日に佐渡国へ流

にちれん ごかんき ときもう

同 士 打 始

さる。日蓮、御勘気の時申せしがごとく、どしうちはじま

おそ ゆえ め かえ そうろう

りぬ。それを恐るるかの故に、また召し返されて候。し

もち ばんみん あくしんさか

かれども、用いることなければ、万民もいよいよ悪心盛ん

なり。

いのち　ご

もう

こくしゅもち

くに　破

たとい命を期として申したりとも、国主用いずば国やぶ

うたが

抓　知

のちもち

わ　とが

れんこと疑いなし。つみしらせて後用いずは我が失にはあ

おも

い

ぶんえいじゅういちねんごがつじゅうににち

そうしゅうかまくら

らずと思つて、去ぬる文永十一年五月十二日、相州鎌倉を

い　ろくがつじゅうしちにち

しんざん

こじゅう

かどいつちよう

い

出でて、六月十七日よりこの深山に居住して、門一町を出

すで　ごかねん

経

でず、既に五箇年をへたり。

もと

ぼうしゅう

もの

そうら

じとう

とうじょうのさえもののじようかげのぶ

本は房州の者にて候いしが、地頭・東条左衛門尉景信

もう

者

ごくらくじどの

とうじさえもののにゅうどう

いつさい

ねんぶつしゃ

と申せしもの、極楽寺殿・藤次左衛門入道・一切の念仏者に

語

たびたび

もんちゅう

けつく

かつせん　お

かたらわれて、度々の問註ありて、結句は合戦起こつて

そうろううえ ごくらくじどの おんかとうど り 曲 とうじよう

候上、極楽寺殿の御方人、理をまげられしかば、東条の

こおり 阻 い ふ ぼ は か み すうねん

郡ふせがれて入ることなし。父母の墓を見ずして数年なり。

こくしゆ ごかんきにど だいにど そと おんる き

また国主より御勘気二度なり。第二度は、外には遠流と聞こ

うち く び き かまくらたつ くち もう

えしかども、内には頸を切るべしとて、鎌倉竜の口と申す

ところ くがつじゆうにち うしのと き く び ざ ひ 据 そうら

処に、九月十二日の丑時に頸の座に引きすえられて候い

そうら つき もの え

き。いかがして候いけん、月のごとくにおわせし物、江の

しま と い つか かしら 懸 そうら つか

島より飛び出でて使いの頭へかかり候いしかば、使い

恐 斬 し さい 数 多

おそれてきらず。とこうせしほどに子細どもあまたありて、

よ く び 脱 さ どの く に 斬

その夜の頸はのがれぬ。また佐渡国にてきらんとせしほど

にちれん もう

かまくら 同士打 はじ

つか

に、日蓮が申せしがごとく鎌倉にどしうち始まりぬ。使い

走 くだ くび

けつく 許 いま

やま

はしり下つて頸をきらず、結句はゆるされぬ。今はこの山に

ひと 住 そうろう

独りすみ候。

さどのくに とき

さと はる 隔

の やま

佐渡国にありし時は、里より遥かにへだたれる野と山と

ちゅうかん

塚 原 もう ござんまいしよ

いっけん

の中間に、つかはらと申す御三昧所あり。かしこに一間

しめん どう

空 板 間 合 しへき

破

あめ

四面の堂あり。そらはいたまあわず、四壁はやぶれたり。雨

外

ゆき うち つ ほとけ

むしろ たたみ

はそとのごとし、雪は内に積もる。仏はおわせず。筵・畳

いちまい

わ こんぽん たも

は一枚もなし。しかれども、我が根本より持ちまいらせて

そうろうきようしゆしやくそん

た ほけきよう て 握

みの

候 教主釈尊を立てまいらせ、法華経を手になぎり、蓑を

着 かさ 差 い 見 ひと 与 じき
き、笠をさして居たりしかども、人もみえず、食もあたえ

ずして四箇年なり。彼の蘇武が胡国にとめられて、十九年が
しかねん か そぶ ここく 留 じゅうくねん

間、蓑をき、雪を食としてありしがごとし。
あいだ みの 着 ゆき じき

今またこの山に五箇年あり。北は身延山と申して天に
いま やま ごかねん きた みのぶさん もう てん

はしだて、南はたかとりと申して鶏足山のごとし。西は
梯 立 みなみ 鷹 取 もう けいそくせん にし

なないたがれと申して鉄門に似たり。東は天子がたけと申
七 面 もう てつもん に ひがし てんし 岳 もう

して富士の御山にたいしたり。四つの山は屏風のごとし。北
ふじ みやま 太子 よつ やま びょうぶ きた

に大河あり。早河と名づく。早きこと箭をいるがごとし。南
たいが はやかわ な はや や 射 みなみ

に河あり。波木井河と名づく。大石を木の葉のごとく流す。
かわ はきいかわ な おおいし こ は なが

ひがし ふじかわ きた みなみ なが 千 鉾 衝

東には富士河、北より南へ流れたり。せんのほこをつく

うち たき みのぶ たき もう はくふ てん ひ

がごとし。内に滝あり。身延の滝と申す。白布を天より引く

うち きようしよう ち にちれん あんじち しんざん

がごとし。この内に狭小の地あり。日蓮が庵室なり。深山

ひる ひ みたてまつ よる つき なが みね

なれば昼も日を見奉らず、夜も月を詠むることなし。峰に

巴 峡 さる 喧 たに なみ くだ おと つづみ う

ははこうの猿かまびすしく、谷には波の下る音、鼓を打つ

ち 敷 おおいしおお やま がりやく ほか

がごとし。地にはしかざれども大石多く、山には瓦礫より外

もの こくしゆ 憎 たも ばんみん 訪 ふゆ

には物もなし。国主はにくみ給う。万民はとぶらわず。冬は

ゆきみち ふさ なつ くさ生 茂 しか とおね 恨 せみ

雪道を塞ぎ、夏は草おいしげり、鹿の遠音うらめしく、蟬の

な こえ 喧 とぶら ひと いのち 続

鳴く声かまびすし。訪う人なければ命もつぎがたし。

膚 隠 ころも そうつら ころも 送

はだえをかくす衣も候わざりつるに、かかる衣をおくら

たま とうら

せ給えるこそ、いかにとも申すばかりなく候え。

み ひと き ひと 哀 もう としころ 慣

見し人、聞きし人だにもあわれとも申さず、年比なれし

でし 仕 げにん みな逃 う 訪

弟子、つかえし下人だにも、皆にげ失せとぶらわざるに、聞

み ひと おんころざし あわ

きもせず見もせぬ人の御志、哀れなり。ひとえにこれ、

わか わ ふぼ う 変 たま じゅうらせつ ひと

別れし我が父母の生まれかわらせ給いけるか。十羅刹の人

み い 替 おも 寄 たも

の身に入りかわりて思いよらせ給うか。

とう だいそうこうてい よ ほうししようぐん もう ひと みこ

唐の代宗皇帝の代に、蓬子將軍と申せし人の御子・

りじよせんしようぐん もう ひと ちよくじよう こうむ きた こち せ

李如暹將軍と申せし人、勅定を蒙つて北の胡地を責め

わ せいすうじゅうまんき う と ここく い ど

しほどに、我が勢数十万騎は打ち取られ、胡国に生け取ら

しじゅうねんようや 経 め 語 こ 儲

れて、四十年漸くへしほどに、妻をかたらい、子をもうけ

こち なら い ど かわ ころも ふく けおび 掛

たり。胡地の習い、生け取りをば皮の衣を服せ、毛帯をか

そうろう しょうがつついたち とう いかん 許

けさせて候が、ただ正月一日ばかり唐の衣冠をゆるす。

いちねん かんど こ きも 切 なみだ 流

一年ごとに漢土を恋いて、肝をきり、涙をながす。しかる

とう いくさ 興 とう つわもの こち 攻 とき 隙

ほどに唐の軍おこりて、唐の兵、胡地をせめし時、ひま

得 こち さいし 振 捨 逃 とう つわもの

をえて胡地の妻子をふりすててにげしかば、唐の兵は

こち 夷 と くび 斬

胡地のえびすとして捕らえて、頸をきらんとせしほどに、と

とくそうこうてい 参 もう

こうして徳宗皇帝にまいらせてありしかば、いかに申せど

き

解

たま

みなみ

くに

ごえつ

もう

かた

なが

も聞きもほどこせ給わずして、南の国、呉越と申す方へ流

りじよせんなが

い

すす

りようげん

ほんごう

み

されぬ。李如暹歎いて云わく「進んでは涼原の本郷を見る

え

しりぞ

こち

さいし

あ

え

うんぬん

ことを得ず、退いては胡地の妻子に逢うことを得ず」云々。

こころ

こち

さいし

捨

とう

ふる

すみか

み

この心は、胡地の妻子をもすて、また唐の古き栖をも見ず、

くに

なが

なげ

わ

み

だいちゆう

あらぬ国に流されたりと歎くなり。我が身には大忠ありし

なげ

かども、かかる歎きあり。

にちれん

にほんこく

たす

おも

こころ

日蓮もまたかくのごとし。日本国を助けばやと思う心に

もう

い

わ

う

くに

塞

よつて申し出だすほどに、我が生まれし国をもせかれ、ま

なが

くに

はな

しんざん

籠

そうろう

た流されし国をも離れぬ。すでにこの深山にこもりて候

が、彼の李如暹かりじよせんに似てに候なり。そうろうただし、本郷にも流され

ところ さいし

し処にも妻子なければ、歎くことはよもあらじ。ただ、父母

墓

馴

ひとびと

覚

東

のはかと、なれし人々のいかなるらんとおぼつかなしと

もう

も申すばかりなし。

ただし、うれしきことは、武士の習い、君の御ために

うじ

せた

わた

さき

駆

ぶし

なら

きみ

おん

ひと

宇治・勢多を渡し、前をかけなんどしてありし人は、たと

み

し

な

こうだい

あ

そうろう

にちれん

い身は死すれども、名を後代に挙げ候ぞかし。日蓮は

ほけきよう

たびたびところ

追

いくさ

み

て

負

法華經のゆえに度々所をおわれ、戦をし、身に手をおい、

でしとう

ころ

りようど

おんる

すで

くび

およ

弟子等を殺され、両度まで遠流せられ、既に頸に及べり。

これひとえに法華經の御ためなり。法華經の中に仏説かせ

たま われめつど のち のち ごひやくさい にせんにひやくよねん過

給わく「我滅度して後、後の五百歳・二千二百余年すぎて、

きようえんぶだい るふ とき てんま ひと み い 替

この經閻浮提に流布せん時、天魔、人の身に入りかわりて、

きよう ひろ しん もの

この經を弘めさせじとて、たまたま信ずる者をば、あるい

罵 う ところ 移 殺

はのり、打ち、所をうつし、あるいはころしなんどすべし。

とき 前 もの さんぜじつぼう ほとけ くよう

その時、まずさきをしてあらん者は、三世十方の仏を供養

くどく う われ いんい なんぎようくぎよう くどく ゆず

する功德を得べし。我また因位の難行苦行の功德を譲るべ

と たも しゆい

し」と説かせ給う〈取意〉。

かこ ふきようぼさつ ほけきよう ぐつう たま

されば、過去の不輕菩薩は法華經を弘通し給いしに、

びく びくにとう ちえ 賢 にひやくごじつかい たも だいそう

比丘・比丘尼等の智慧かしこく二百五十戒を持てる大僧ど

あつ うばそく うばい 語 ふきようぼさつ 罵

も集まりて、優婆塞・優婆夷をかたらいて、不輕菩薩をのり

う たいてん こころ ひろ たま つい

打ちせしかども、退轉の心なく弘めさせ給いしかば、終に

ほとけ 成 たも むかし ふきようぼさつ いま しゃかぶつ

は仏となり給う。昔の不輕菩薩は今の釈迦仏なり。それ

嫉 う だいそう せんごうあびじこく お

をそねみ打ちなんどせし大僧どもは、千劫阿鼻地獄に堕ち

か ひとびと かんぎよう あみだきようとう すうせん きよう いっさい

ぬ。彼の人々は、觀經・阿彌陀經等の数千の經、一切の

ぶつみよう ね だねんぶつ もう ほけきよう ちゆうや よ まこと

仏名、彌陀念仏を申し、法華經を昼夜に読みしかども、実

ほけきよう ぎようじゃ 怨 ほけきよう ねんぶつ かいとう たす

の法華經の行者をあだみしかば、法華經・念仏・戒等も助

たま せんごうあびじこく お か びくとう はじ

け給わず、千劫阿鼻地獄に堕ちぬ。彼の比丘等は、始めに

ふきようぼさつ

のち　こころ

翻

は不輕菩薩をあだみしかども、後には心をひるがえして、

み　ふきようぼさつ　つか

奴　しゆ　したが

身を不輕菩薩に仕うることに、やつこの主に随うがごとくあ

むけんじごく　免

りしかども、無間地獄をまぬかれず。

いま　にちれん　怨　たも　にほんこく　ひとびと

今また日蓮にあだをせさせ給う日本国の人々もかくのご

かれ　に　かれ　め　う

とし。これは彼には似るべくもなし。彼は罵り打ちしかど

こくしゆ　るざい　じようもく　がしやく

も、国主の流罪はなし。杖木・瓦石はありしかども、疵を

被　くび　およ　あつく　じようぼく　にじゅうよねん　きず

かぼり、頸までには及ばず。これは悪口・杖木は二十余年

あいだ　隙　きず　被　るざい　くび　およ　でしとう

が間ひまなし。疵をかぼり、流罪・頸に及ぶ。弟子等は、

しよりよう　め　牢　い

あるいは所領を召され、あるいはろうに入れ、あるいは

おんる

うち い

でんぱた うば

遠流し、あるいはその内を出だし、あるいは田畠を奪いな

よう

ごうとう

かいぞく

さんぞく

むほんとう

もの

んどすること、夜打ち・強盗・海賊・山賊・謀叛等の者よ

激

おこな

しんごん

ねんぶつしゃ

りもはげしく行わる。これまたひとえに真言・念佛者・

ぜんしゅうとう

だいそうとう

うった

か

ひとびと

おんとか

禅宗等の大僧等の訴えなり。されば、彼の人々の御失は

だいち

あつ

だいち

おおかぜ

たいかい

ふね

う

大地よりも厚ければ、この大地は大風に大海に船を浮かぶ

どうてん

てん

はちまんしせん

ほしいか

ちゅうや

るがごとく動転す。天は八万四千の星瞋りをなし、昼夜に

てんぺん

隙

うえ

にちがつおお

へんおお

天変ひまなし。その上、日月大いに変多し。

ほとけ

めつご

すで

にせんにひやくにじゅうしちねん

そうろう

だいぞくおう

仏の滅後、既に二千二百二十七年になり候に、大族王

ごてん

てら

焼

じゅうろく

たいこく

そう

くび

き

ぶそうこうてい

が五天の寺をやき十六の大国の僧の頸を切り、武宗皇帝の

かんど　てら　うしな　ぶつぞう　碎　にほんこく　もりや　しゃかぶつ

漢土の寺を失い仏像をくだき、日本国の守屋が釈迦仏の

こんどう　ぞう　すみび　焼　そうに　う　責　げんぞく

金銅の像を炭火をもつてやき僧尼を打ちせめては還俗せさ

とき　ほど　すいせい　おおじしん　無　かれ

せし時も、これ程の彗星・大地震はいまだなし。彼には

ひやくせんまんばいす　そうろうだいあく　そうら　かれ　おういちにん

百千万倍過ぎて　候　大悪にてこそ候いぬれ。彼は、王一人

あくしん　だいじんいげ　こころ　お　ごんぶつ

の悪心、大臣以下は心より起こることなし。また権仏と

ごんきよう　かたき　そう　ほけきよう　ぎようじや

権経との敵なり。僧も法華経の行者にはあらず。これは、

いつこう　ほけきよう　かたき　おういちにん　いつこく　ちじん

一向に法華経の敵、王一人のみならず、一国の智人ならび

ばんみんとう　こころ　お　だいあくしん

に万民等の心より起これる大悪心なり。

たと　よにんもの　妬　むね　うち　たいか燃　ゆえ　み

譬えば、女人物をねためば、胸の内に大火もゆる故に、身

へん あか み け 逆 立 ごたい 振 おもて ほのお

変じて赤く、身の毛さかさまにたち、五体ふるい、面に炎

上 顔 しゆ 差 まなこ 丸

あがり、かおは朱をさしたるがごとし。眼まろになりて、

猫 まなこ 鼠 見 て 慄 柏

ねこの眼のねずみをみるがごとし。手わななきて、かしわ

は かぜ ふ に 傍 ひと み

の葉を風の吹くに似たり。かたわらの人これを見れば、

だいきじん こと にほんこく こくしゆ しよそう びく びくにとう

大鬼神に異ならず。日本国の国主・諸僧・比丘・比丘尼等も

侍 みだねんぶつ にちれん

またかくのごとし。たのむところの弥陀念仏をば日蓮が

むけん じごく ごう い き しんごん ぼうこく ほう い き

無間地獄の業と云うを聞き、真言は亡国の法と云うを聞き、

じさい てんま しよい い き ねんじゆ 繰 は

持斎は天魔の所為と云うを聞いて、念珠をくりながら歯を

食 違 れい 振 頸 踊 かい たも

くいちがえ、鈴をふるにくびおどりおり、戒を持ちながら

あくしん

懷

ごくらくじ

い

ぼとけ

りようかんしようにん

お

がみ

悪心をいだく。極楽寺の生き仏の良観聖人、折り紙を

捧

かみ

うった

けんちようじ

どうりゆうしようにん

こし

の

ささげて上へ訴え、建長寺の道隆聖人は輿に乗って

ぶぎようにん

跪

もろもろ

ごひやくかい

あまごぜんとう

帛

奉行人にひざまずく。諸の五百戒の尼御前等は、はくを

使

伝

奏

つかいててんそうをなす。

ほけきよう

よ

読

き

聞

これひとえに、法華経を読んでよまず、聞いてきかず、

ぜんどう

ほうねん

せん

なか

ひと

な

こうぼう

じかく

だるま

善導・法然が「千の中に一りも無し」と、弘法・慈覚・達磨

とう

みな

けろん

きようげ

べつでん

甘

古

さけ

酔

等の「皆これ戯論」「教外に別伝す」のあまきふる酒にえわ

たま

酒

狂

せ給いて、さかぐるいにておわするなり。

ほっけ

もつと

だいいち

きようもん

み

だいにちきよう

「法華は最も第一なり」の経文を見ながら、「大日経は

ほけきよう　すぐ

ぜんしゆう

さいじよう

ほう

りつしゆう

たつと

法華經に勝れたり」「禪宗は最上の法なり」「律宗こそ貴

ねんぶつ

われ

ぶん

適

もう

さけ

けれ」「念仏こそ我らが分にはかないたれ」と申すは、酒に

よ　ひと

酔える人にあらずや。

ほし

み

つき

勝

いし

み

こがね

勝

ひがし

星を見て月にすぐれたり、石を見て金にまされり、東を

み

にし

い

てん

ち

もう

もの

狂

もと

つき

こがね

見て西と云い、天を地と申す物ぐるいを本として、月と金

ほし

いし

すぐ

ひがし

ひがし

てん

てん

は星と石とには勝れたり、東は東、天は天なんど、あり

もう

もの

怨

たま

せい

おお

つ

のままに申す者をばあだませ給わば、勢の多きに付くべき

もの

狂

おお

あつ

もと

か。ただ物ぐるいの多く集まれるなり。されば、これらを本

い

なんによ

みなじごく

お

とせし云うにかいなき男女の、皆地獄に堕ちんことこそ

哀 そうら

あわれに候え。

ねはんぎよう ほとけと たま まっぼう い ほけきよう ぼう

涅槃経には、 仏説き給わく「末法に入つて、 法華経を謗

じごく お もの だいちみじん おお しん ほとけ 成

じて地獄に墮つる者は大地微塵よりも多く、 信じて仏にな

もの そうじよう ど すく と

る者は爪上の土よりも少なし」と説かれたり。 これをもつ

はか たも にほんこく しよにん そうじよう ど にちれんいちにん

て計らせ給うべし。 日本国の諸人は爪上の土、 日蓮一人は

じっぽう みじん そうろう しゆくじゆう

十方の微塵にて候べきか。 しかるに、 いかなる宿習に

おんころも おく たも そうじよう ど かず い

ておわすれば御衣をば送らせ給うぞ。 爪上の土の数に入

思

らんとおぼすか。

ねはんぎよう い だいち うえ はり た おおかぜ ふ

また涅槃経に云わく「大地の上に針を立てて、 大風の吹か

ときだいぼんてん

いと くだ

いと 端 直

くだ はり

ん時大梵天より糸を下さんに、糸のはしすぐに下つて針の

あな い

まつだい ほけきよう ぎようじや

遇

穴に入ることはありとも、末代に法華經の行者にはあいが

ほけきよう い

たいかい そこ かめ

さんぜんねん いちど

たし」。法華經に云わく「大海の底に亀あり。三千年に一度

かいじよう 上

せんだん う ぎ あな 行 合

休

海上にあがる。梅檀の浮き木の穴にゆきあいてやすむべし。

かめいちもく

ひがめ にし もの ひがし

しかるに、この亀一目なるが、しかも僻目にて、西の物を東

み ひがし もの にし み

まつだいあくせ う

と見、東の物を西と見るなり」。末代惡世に生まれて、

ほけきよう

なんみようほうれんげきよう あな み い なんによ

法華經ならびに南無妙法蓮華經の穴に身を入るる男女に

譬 たま

たとえ給えり。

かこ えん

ひと 訪

いかなる過去の縁にておわすれば、この人をとぶらわん

おぼ

みこころ

付

たま

ほけきよう

み

と思しめす御心はつかせ給いけるやらん。法華經を見まい

そうら

しやかぶつ

ひと

おんみ

い

たま

らせ候えば、釈迦仏のその人の御身に入らせ給いて、かか

こころ

付

と

そうろう

たと

おも

る心はつくべしと説かれて候。譬えば、なにとも思わぬ

ひと

さけ

飲

酔

こころい

きた

ひと

もの

人の酒をのみてえいぬれば、あらぬ心出で来り、「人に物を

取

おも

こころい

きた

いっしょうけんどん

とらせばや」なんと思ふ心出で来る。これは、一生慳貪に

がきどう

お

ひと

さけ

えん

ぼさつ

い

替

して餓鬼道に墮つべきを、その人の酒の縁に菩薩の入りか

たも

わらせ給うなり。

じよくすい

たま

い

みず澄

つき

む

濁水に珠を入れぬれば水すみ、月に向かいまいらせぬれ

ひと

こころ

懂

え

描

き

こころ無

恐

ば人の心あこがる。画にかける鬼には心なけれどもおそ

遊女え描わ盗おとこ嫉おとも

ろし。とわりを画にかけば、我が夫をばとらねどもそねま

にしき襦織きおも

し。錦のしとねに蛇をおれるは服せんとも思わず。身の

熱温かぜ厭ひとこころ

あつきにあたたかなる風いとわし。人の心もかくのごとし。

ほけきようかたみこころ寄たもにょにんおんみ

法華經の方へ御心をよせさせ給うは、女人の御身なれども、

りゆうによおんみいたも

竜女が御身に入らせ給うか。

おわりのじろうひようのじようどのおんことげんざんいそうら

さてはまた、尾張次郎兵衛尉殿の御事。見参に入つて候

ひとにちれんほうもんもうそうらたにん似

いし人なり。日蓮はこの法門を申し候えば、他人にはにず

おおひとまみ愛もうひとせんにん

多くの人に見えて候えども、いとおしと申す人は千人に

いちにん有難かひとこころ寄おも

一人もありがたし。彼の人は、よも心よせには思われたら

じたいひと

憎

振

万

ひと

じなれども、自体人がらくげなるふりなくよろずの人に

情

おも

ひと

こころ

なか

受

思

なさけあらんと思ひし人なれば、心の中はうけずこそおぼ

げんざん

とき

偽

愚

ひと

しつらめども、見参の時はいつわりおろかにてありし人な

にようぼう

しん

由

まこと

おも

そうら

り。また女房の信じたるよしありしかば、実とは思ひ候

甚

ほけきよう

そむ

わざりしかども、またいとう法華経に背くことはよもおわ

頼

辺

そうろう

ほけきよう

うしな

せじなれば、たのもしきへんも候。されども、法華経を失

ねんぶつ

ねんぶつしや

しん

わ

み

たぶん

ねんぶつしや

う念仏ならびに念仏者を信じ、我が身も多分は念仏者にて

ごしよう

覚

東

たと

こくしゆ

おわせしかば、後生はいかがとおぼつかなし。譬えば、国主

宮

仕

懇

おん

はみやづかえのねんごろなるには、恩のあるもあり、また

すこ

疎

そつら

科

なきもあり。少しもおろかなること候えば、とがになるこ

うたが

ほけきよう

しん

と疑いなし。法華經もまたかくのごとし。いかに信ずるよ

ほけきよう

おん

敵

しし

交

うなれども、法華經の御かたきにも、知れ知らざれ、まじわ

むけんじごく

うたが

りぬれば、無間地獄は疑いなし。

そつら

か
にようぼう

おんなげ

推

これはさておき候いぬ。彼の女房の御歎き、いかがとお

量

哀

藤

花

盛

しはかるに、あわれなり。たとえば、ふじのはなのさかん

まつ

懸

おも

まつ

倒

なるが、松にかかりて思うこともなきに、松のにわかになお

薦

垣

懸

やぶ

れ、つたのかきにかかれるが、かきの破れたるがごとくに

思

うち

い

あるじ

破

いえ

はしら

おぼすらん。内へ入れば主なし、やぶれたる家の、柱な

きやくじんきた

そと い

ひと

きがごとし。客人来れども、外に出でてあいしらうべき人

よ 暗

闇 凄

墓 見

もなし。夜のくらきにはねやすさまじく、はかをみれば

標

こえ 聞

おも 遣

しで やま

しるしはあれども声もきこえず。また思いやる、死出の山・

さんず

かわ

たれ

こ

たも

ひと

なげ

たも

三途の河をば誰とか越え給うらん。ただ独り歎き給うらん。

留 置

ごぜん

われ

独

遣

とどめおきし御前たち、いかに我をばひとりやるらん、さ

契

なげ

たも

あき

よ

更

はちぎらざりとや歎かせ給うらん。かたがた、秋の夜のふけ

ふゆ

あらし

訪

こえ

ゆくままに、冬の嵐のおとずるる声につけても、いよいよ

おんなげ

おも

そうろう

なんみようほうれんげきよう

なんみようほうれんげきよう

御歎き重り候らん。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

こうあんがんねんつちのえとらくがつむいか

にちれん

かおう

弘安元年戊寅九月六日

日蓮

花押

みようほうあまごぜんおん 方

妙法尼御前御かたへ